

## — 臨床 —

### 過去 21 年間の術後性上顎嚢胞の臨床統計的観察

須田大亮, 五島秀樹, 川原理絵, 清水 武, 野池淳一, 柴田哲伸, 植松美由紀, 細尾麻衣,  
橋詰正夫, 横林敏夫

長野赤十字病院口腔外科 (主任: 横林 敏夫部長)

### Clinicostatistical Study of the Postoperative Maxillary Cysts of Last Twenty-one Years

Daisuke Suda, Hideki Goto, Rie Kawahara, Takeshi Shimizu, Junichi Noike, Akinobu Shibata,  
Miyuki Uematsu, Mai Hosoo, Masao Hashizume, Toshio Yokobayashi

*Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Nagano Red Cross Hospital  
(Chief: Toshio Yokobayashi)*

平成 24 年 10 月 5 日受付 平成 24 年 10 月 23 日受理

#### Abstract:

We analyzed clinically and statistically 289 cases of postoperative maxillary cyst treated at the Department of Oral and maxillofacial Surgery, Nagano Red-Cross Hospital during the twenty-one years from January 1991 to December 2011 to learn the tendency of recent postoperative maxillary cyst. The following results were obtained.

1. The patients consisted of 164 males and 125 females.
2. The age ranged from 25 to 81 years. Patients older than 40 years accounted for 89.3% (258 cases).
3. The cysts occurred only on the right side in 123 cases, only on the left side in 154 cases, and on both sides in 12 cases.
4. The period between the onset of initial symptoms and admittance was less than 3 months in 74.7% (216 cases), but in 20 cases, the latency was more than 3 years.
5. 144 patients (49.8%) underwent initial radical operation in the second decade, and 243 cases (84.1%) at less than 30 years.
6. The period between the initial operation and the onset of symptoms was between 20 to 39 years in 186 cases (64.4%).
7. According to Iwamoto's classification (Type 1: cheek symptoms, Type 2: eye symptoms, Type 3: nose symptoms, Type 4: oral symptoms), the initial symptoms were type 1+4 in 158 cases and type 1+3+4 in 42 cases. Cheek paresthesia was observed in 38 cases, eye symptoms were observed in only 15 cases.
8. For treatment, cyst extirpation and counteropening were performed in 221 cases (76.5%) under general Anesthesia.

**Key words:** Postoperative maxillary cyst (術後性上顎嚢胞), Clinicostatistical study (臨床統計的検討)

#### 要旨:

術後性上顎嚢胞は最近減少のためか、臨床統計的報告はあまり見られない。今回私たちは、本疾患の実態を明らかにするため、平成 3 年 1 月より平成 23 年 12 月までの 21 年間に、長野赤十字病院口腔外科を受診した術後性上顎嚢胞患者 289 名、293 例につき、臨床統計的検討を行い、以下の結果を得た。

- 1 患者は男性 164 名、女性 125 名であった。
- 2 年齢は最低 25 歳から最高 81 歳で、40 歳代、50 歳代、60 歳代で 258 例と、同年代で 89.3% を占めていた。
- 3 患側は右側のみが 123 例 (42.6%)、左側のみが 154 例 (53.3%) で、両側に認められたものは 12 例 (4.2%) であった。
- 4 自覚症状発現から当科初診までの期間は 3 か月未満が 216 例で、全体の 74.7% であったが、3 年以上の長期にわ

たる症例も 20 例 (6.9%) あった。

- 5 初回上顎洞炎根治手術の時期は、10 歳代が最も多く、全体の 49.8% を占めており、84.1% が 30 歳未満で手術を受けていた。
- 6 初回手術後、症状が発現するまでの経過年数は 20 年から 39 年が 186 名と最も多く、64.4% を占めていた。
- 7 初診時の症状は、岩本らの分類 (1 型 : 頬部症状型, 2 型 : 眼症状型, 3 型 : 鼻症状型, 4 型 : 口腔症状型) によれば、1 型と 4 型の合併型が 157 例 (53.7%) と最も多く、次いで 1 型, 3 型, 4 型の合併型が 41 例 (14.0%), 眼症状を合併していたものは 15 例 (5.1%) のみであった。知覚異常は 38 例 (13.0%) に認められた。
- 8 治療は全身麻酔下に、嚢胞摘出, 対孔形成を行った症例が 219 例 (74.8%) であった。

## 【緒 言】

術後性上顎嚢胞は、上顎洞炎手術後の晩発性合併症として 1927 年久保<sup>1)</sup>により手術後性頬部嚢胞として報告されて以後、多くの研究、報告がなされている<sup>2-8)</sup>。本嚢胞は、残存した上顎洞粘膜、粘液腺からの分泌貯留、あるいは自然孔、対孔の閉鎖による再生上顎洞の孤立により生ずるといわれており、口腔外科領域において比較的遭遇する機会の多い疾患の一つである。しかしながら、最近では本疾患の減少のためか、本疾患に対する臨床統計的報告はほとんどみられない。

そこで今回私達は、本疾患の実態を明らかにする目的に、過去 21 年間に長野赤十字病院口腔外科で経験した術後性上顎嚢胞患者について、臨床統計的検討を行ったので、その結果を報告する。

## 【研究対象および方法】

対象は、平成 3 年 1 月より平成 23 年 12 月までの 21 年間に、長野赤十字病院口腔外科において手術を行い、

病理組織学的に術後性上顎洞嚢胞と確定診断された 289 名、293 例である。それらについて、性別および年齢、罹患側、初回上顎洞根治術の時期とその後の経過年数、自覚症状発現より当科来院までの期間、紹介医療機関、主訴、現症、術前処置と手術および予後の検討を行った。

## 【結 果】

### 1. 性別および年齢

患者の性別は、男性 164 名、女性 125 名で、男女比は 1.32 : 1 と男性がやや多かった。当科初診時の年齢は、最低が 25 歳、最高が 81 歳で、50 歳代が 99 名と最も多く、次いで 40 歳代が 80 名、60 歳代が 60 名で、同年代で全体の 82.7% を占めていた。(図 1)

### 2. 罹患側

嚢胞の患側は、右側のみが 123 名 (42.5%)、左側のみが 154 名 (53.3%) で、両側に認められた症例は 12 名 (4.2%) であった。両側に認められた 12 例では全て両側に術後性上顎嚢胞の手術を行った。(表 1)

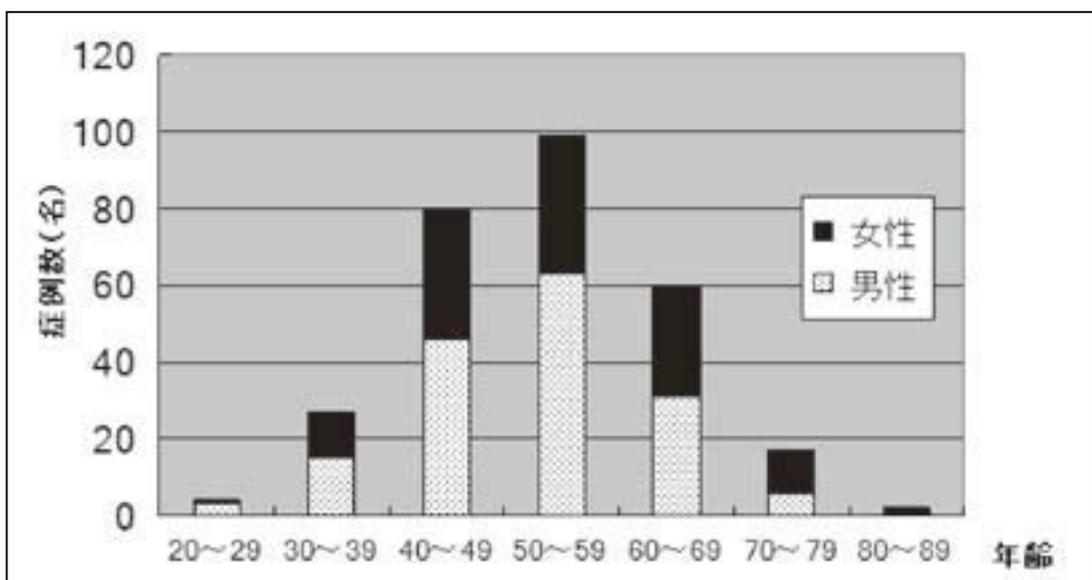


図 1 性別および年齢